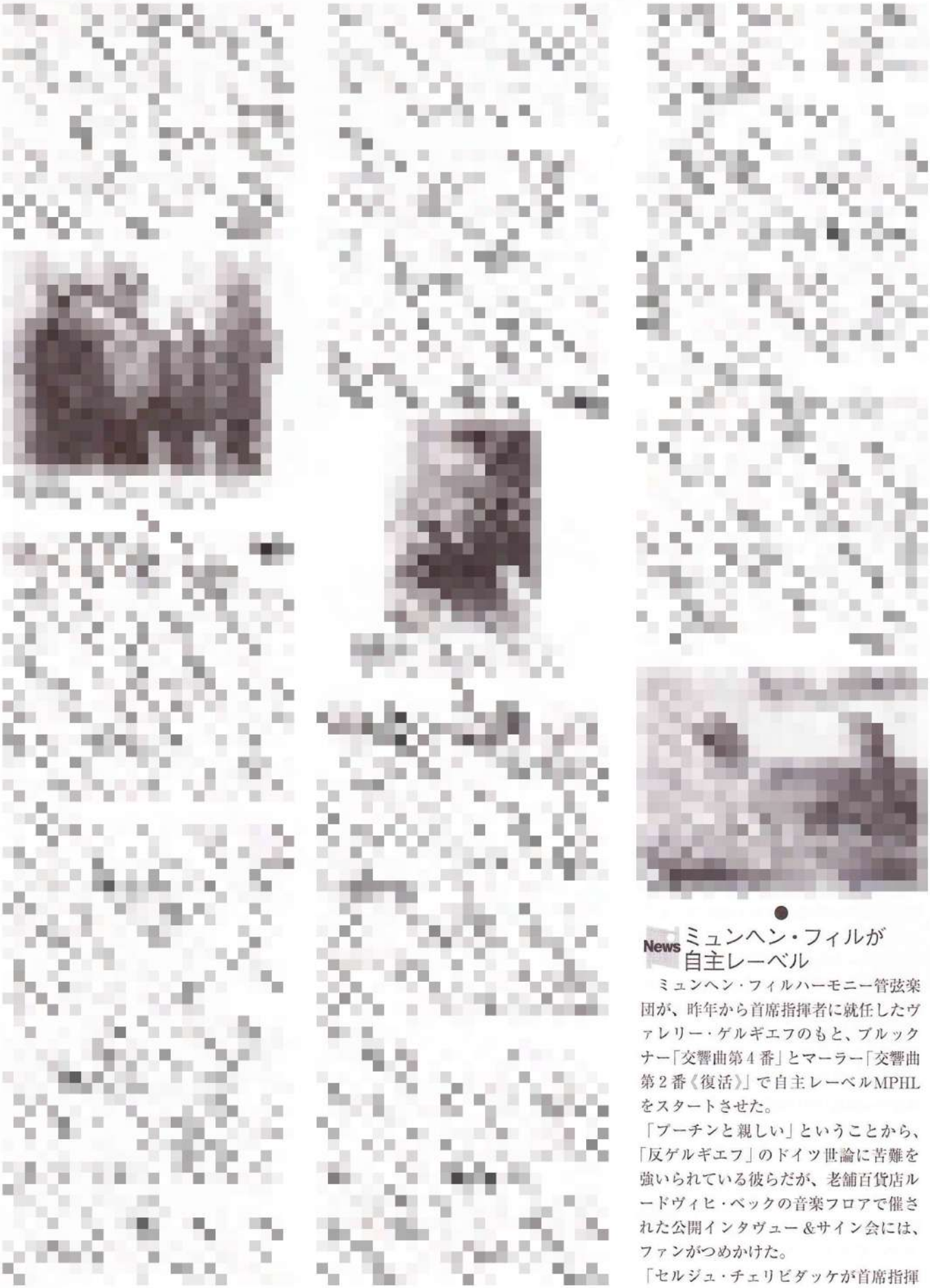
Scramble Shot



News ミュンヘン・フィルが自主レーベル

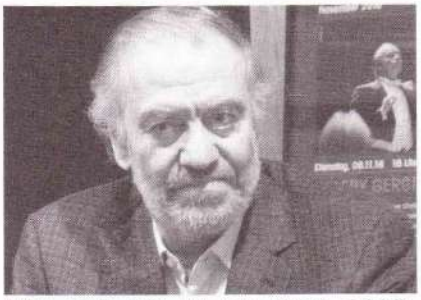
ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団が、昨年から首席指揮者に就任したヴァレリー・ゲルギエフのもと、ブルックナー「交響曲第4番」とマーラー「交響曲第2番《復活》」で自主レーベルMPHLをスタートさせた。

「プーチンと親しい」ということから、「反ゲルギエフ」のドイツ世論に苦難を強いられている彼らだが、老舗百貨店ルードヴィヒ・ベックの音楽フロアで催された公開インタヴュー＆サイン会には、ファンがつめかけた。

「セルジュ・チェリビダッケが首席指揮

者だった時代に、これらのドイツ・レパートリーは頂点を極めたと見られているが、同じレパートリーを録音することに不安を感じなかったか」という問いに、「もちろん不安は感じたが、作曲家への自分のアプローチが十分かどうか不安を感じず、自信を持てる指揮者は真の音楽家とは言えない。それぞれの作曲家、作品に近付くための旅を通して、初めて独自のアプローチが実現できる。ミュンヘン・フィルは優秀な音楽家の集まりなので、指揮者の仕事はそれぞれのパートをうまく出会わせることだ。良いオーケストラというのは家族のようなもので、周りが奏でる音楽にもしっかり耳を傾けられなければならない」と答えた。実際、ミュンヘン・フィルの楽団員も数人サイン会に集まっており、ゲルギエフとの仕事がいかに楽しいか語ってくれた。

最後に、自分の重要な使命の一つは「優秀だが名の知られていない若手にチャンスを与えることだ」と強調していた。例えば、彼がダニール・トリフォノフを最初に起用した時は、チャイコフスキー国際コンクール優勝前の無名時代だったという。その力説ぶりに、PMFで世界中から選ばれた若者たちがゲルギエフの指導を喜ぶ訳がよく理解できた。（中 東生）



自主レーベルは、ドイツ・レパートリーでのスタートとなる。会見に挑むゲルギエフ ©中 東生